

新生児の感染症に関する研究 総 括 報 告

(分担研究： 新生児の感染症に関する研究)

柴 田 隆

昨年度の研究報告書にも述べたように、新生児・未熟児医療の進歩した今日においても、新生児の感染症対策は重要課題の一つである。intensive careにより出生後の適応障害の危機を乗り越えた児が、その後の経過中に、敗血症あるいは髄膜炎を併発し不幸に転機をとることも少なくない。わが国の指導的立場にあるNICUにおいて養護される超・極小未熟児の中にも、RDSの回復期に敗血症、髄膜炎を合併する例があり、その対策の重要性を指摘した報告は多く、種々の角度から検討されているが、未解決の点も多い。この新生児の感染症に関して研究協力者と共に、昨年度から引き続き研究をおこなっているが、本年度に得られた成果について以下にその概要を述べてみたい。尚、研究成果の詳細は、各々の研究者の報告書に委ねるものとする。

研究成果の概要

1) 新生児感染症の迅速診断法の確立に関する研究：

後藤（名古屋市立城北病院）は、本年度の研究テーマを、新生児感染症の経過とAPR-Scの動向とし、APR-Scの中でも、Haptoglobinの動態について注目し、詳細な検討を行った。まず、100例の剖検例の検討において感染症死亡例では、APR-Sc 3点および2点であり、このAPR-Sc 2点は、全て、Haptoglobinの増加のないAPR-

Sc 2点であったと報告した。臨床例の検討においては、感染症は全てAPR-Sc 3点およびAPR-Sc 2点であったが、重症例あるいは死亡例のAPR-Scは、3点、2点（CRP、 α_1 AG）であり、APR-Sc 2点（ α_1 AG、Hp）の中には、死亡例はなく、Enterovirus 感染症が多く含まれていたと報告し、細菌感染症とVirus感染症の特徴を示唆した。

2) 新生児のエンテロウイルス感染症に関する研究：

鳥居（北野病院）は、本年度のテーマを、新生児室におけるエンテロウイルス水平感染源としての看護従事者の意義とし、エンテロウイルス感染症の多い1987年の夏に、2施設でエンテロウイルス感染症についてサーベイランスを行ったが、看護従事者からの水平感染は否定的であり、感染源としては母親と推定される結果を得たと報告した。

3) 新生児感染症の発達薬理学的研究：

吉岡（旭川医大）は、本年度のテーマを、新生児腸内菌叢にあたるAmpicillin静注投与の影響とし、Ampicillin投与をうけた7例の母乳栄養の新生児の腸内菌叢を調べ、ビフィズス菌にたいしてかなりの影響のあることを明らかにした。

4) 新生児感染症の免疫学的治療に関する研究：

岩瀬（関西医大）は、本年度のテーマを、好中球のSubpopulationとして、臍帯血好中球で検討を行いその研究成果を報告した。好中球をロゼッ

ト形成好中球とロゼット非形成好中球の2つの Subpopulation に分類し、各々の好中球の走化能を比較検討した。臍帯血好中球のロゼット形成率は、健康成人の好中球に比し有意に低く、好中球走化能はロゼット形成好中球の方がロゼット非形成好中球より高いことを証明した。この事が、新生時期の易感染性の一因と推定した。

5) 新生児の経産道感染症の諸問題に関する研究：

関（鹿児島市立病院）は、本年度のテーマを、PROM、早産とクラミジア・トラコモティスとした。15例のPROM、4例の早産、4例の多胎の早産例で検討をした。これら全例の妊婦子宮頸管内のスワブより抗原は検出されなかった。妊婦のIgG抗体が、6例に検出されたが、これは感染の既往を示すものであり、このIgG抗体は、新生児に移行するが、1ヶ月後には漸減低下した。さらに、新生児センター長期入院の28例の抗体検索で、3例にIgG抗体をみたが、母体よりの移行抗体とおもわれた。

6) NICUにおける母子相互作用を中心とした感染予防対策に関する研究

中嶋（都立豊島病院）は、本年度のテーマを、未熟児室（NICUを含む）における家族面会開始後の院内感染症発生の動向として研究を行った。未熟児室（NICUを含む）において、家族面会開

始前の1年間および開始後4年間の細菌感染症発生を詳細に比較した。その結果は、面会開始3年後に、膿疱、細菌性皮膚炎の増加をみたが、いずれも散発的の発生であり、院内感染対策の徹底により翌年には減少したと報告し、全体としては、細菌感染症の発生には大きな変化は見られなかったと結論している。

7) NICUにおける施設・設備を中心とした感染予防対策に関する研究

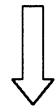
柴田（順天堂大伊豆長岡）は、本年度のテーマを、保育器の消毒についての検討とした。保育器の消毒については、従来、多くの施設で行われていると思われる、消毒薬による拭き取りによる方法では、細菌の汚染をむしろ広げるおそれのある結果であった。ホルマリンガスを用いる方法も、現在、普及しつつあるが、完全な消毒方法とはいえ、改良する点を指摘した。さらに、最近注目され始めたオゾンガスを用いての方法についても検討した結果を報告し、その有用性を示唆した。

以上が、各研究協力者の協力の下に得られた、本年度における研究成果の概要である。新生児感染症については、いまだ多くの問題点をかかえている。次年度以後も、さらに研究を進め、新生児感染症の早期診断、治療の確立を計るとともに、新生児の感染予防対策の確立に寄与したい。



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



昨年度の研究報告書にも述べたように、新生児・未熟児医療の進歩した今日においても、新生児の感染症対策は重要課題の一つである。intensive care により出生後の適応障害の危機を乗り越えた児が、その後の経過中に、敗血症あるいは髄膜炎を併発し不幸に転機をとることも少なくない。わが国の指導的立場にある NICU において養護される超・極小未熟児の中にも、RDS の回復期に敗血症、髄膜炎を合併する例があり、その対策の重要性を指摘した報告は多く、種々の角度から検討されているが、未解決の点も多い。この新生児の感染症に関して研究協力者と共に、昨年度から引き続き研究をおこなっているが、本年度に得られた成果について以下にその概要を述べてみたい。尚、研究成果の詳細は、各々の研究者の報告書に委ねるものとする。